

岩見 和彦氏（関西大学社会学部教授）

●行政主導の時代ではない

—— まず生涯教育について、先生の基本的なお考えをお聞きしたいのですが。

岩見 僕自身、生涯学習・生涯教育の流れは、ほっておいてもいろんなところで起こって来るし、発想もされてくるんでしょうけど、それを積極的にもっと展開するための合いの手、もしくは助力はする必要はない、という消極的な考え方を基本的にはもっています。ある種の意図的なもくろみをもって、国民全体をどうのこうのというのがどうも不自然な時代に入っているようですね。それを、とても良いことをやってるんだからみんながそういう良き生徒になる、一生、「生徒」という役割を変に自覚し過ぎて生きていくというのはなんか不自然である、という立場をとっています。それを言ってしまうと何も始まらないんですが、この点は一応お話ししておかないとね。それにもかかわらず、公民館講座だとか、その種のものには講師として行ったりして、いつもある種の違和感や矛盾を感じているんですけど。面白い話がありましてね、この間も芦屋市のそういうものに頼まれて行って来ましたら、偶然に私のゼミの卒業生のお母さんが来ておられまして色々聞いたんです。芦屋市にも朝日カルチャーセンターがあるんですが、それ以外にも市が力をいれていて、公民館講座とか社会教育に関するメニューというかプログラムがものすごく豊富なんですね。講座が何十とあるんですよ。場所は芦屋の市民会館のようなところでして、朝日カルチャーセンターにいく人とはかなり層も違っているようです。上流階級のあるいは上流指向の人達はカルチャーセンターに行って、片仮名のカルチャーに心地よく浸り、プログラムを見て実質的に勉強しようという素直な学習者は気楽に公民館に足を運ぶ。でも中には重複している人もいましてね、ヘビースモーカーならぬヘビーユーザーもけっこう多いらしいです。そういう状況を聞くと、行政、民間が競って市民の各種各層を「生徒」にしている状況があって、そこまで「生涯教育化社会」にされているんだなあということではびっくりしたんですね。というのは6、7年前行政が色々やり出したころ、ある程度は流行るだろうとは思っていたんですが、いずれピークがくるだろうとも思っていました。遅からずニーズが弱まって行って、行政も手離していくだろうという予測を漠然ともっていたんです。ところが芦屋市に関しては、と言った方がいいのかも知れませんが、予測と違って、そんな状況だと教えていただいたわけです。他の地域の状況は、全般的には違うでしょうか？

—— どこかの市で、公開講座的なものをやりますと先生がかわいそうなぐらい生徒が集まらないとか、行政の意気込みに反して社会教育というのが地域に受け入れられていないというようなことも聞いたことがありますけれどね。

岩見 僕が直感的に思ったのは地域住民の特性の問題は別にして、成功の一因はやはり、メニューの多さあるいは面白さみたいなものかなということ。芦屋市の場合、担当職員がその点

を大変熱心にやっている。でも全般的には停滞の方向に向かって来ているとは思っています。

## ●「趣味」がキーワード

—— しかし社会状況からみても、高齢化社会に向かって余暇が増えてきてニーズは高まってきている様に思うのですが。

岩見 だから結局趣味の部分でしょうね。僕は余暇の問題を振り返ったときに、趣味というのがキーワードだと思うんです。だから生涯教育という領域でももっともっと特殊な細分化された趣味、単に陶芸ではなく灰の鉄分の面白さ、釉薬がどうのこうのというかなり個別的な所を要求しだすんじゃないか、と。趣味というのはもっと差異化していく、余暇社会が取り沙汰される以前は大づかみにしててよかったんですがね。国際化なんて言われているのも今の日本にはすごく作用していて、多様化、差異化を促進する大きなファクターである。スペインの何とかとか、ブラジルのケーキを作ろうとかいう恰好のものをどんどん求め出している。果たしてそれを提供することがどこまで可能なのか？おそらくそうなるとかちコミだとか、最近の言葉で言うとネットワークだとかが自己増殖的に形成され、放っておいてもある程度活性化するでしょうね。そうしたら生涯教育などを実施する自治体なり、民間の企業なりはどっかでおいできばりをくうんじゃないですかね。

—— それは先程の言葉で言うメニューなりプログラムを立てることが不可能になってくるといことですか？

岩見 無理でしょう。そのときには恐らく一連の情報誌の動きではないけれど、趣味のネットワークキングというような雑誌が必ず出て来るでしょうし、それにパソコン通信、ファックス通信と展開するんでしょうけれどまあそれはおいとくとして、原理としては絶対そういう方向へ行く。そういったときはむしろ情報提供する仕事の方が大事になっていく。そんな気がするんですよ。情報産業としての生涯学習コーディネーションセンターというようなものは重宝がられていくだろうし…。

## ●放送教育はライブとの組み合わせで生きる

—— ビデオ屋さんにビデオを借りにいくように、一つのビデオに大学が一つずつ詰まっていたとようなイメージでしょうか。

岩見 勿論ある年になって、万葉集が勉強したくなるとかというオーソドックスな知的な好奇心なり、ニーズ、学習欲求というようなものはある比率では残るとは思いますがね。ただそれをどういう形で学習していくかというときに、このプロジェクトが直接関係してくるでしょうね。広い意味でのメディアというものがどうあるべきかということが中心になって。基本的

に映像メディアはある程度役に立つでしょうけれど、講義や講演に関しては今の技術の水準でもの足りるという感じはしないですね。臨場感云々という問題を含めてね。だからライブみたいなものの必要性は分かるんですがね。放送教育あるいは通信教育で抜け落ちていくヒューマンな部分、ライブのリアリティとは異質であると感じる心性というものは残るでしょうね。メディアが我々のリアリティ感覚を変えてしまったとはいえ、そう簡単にはイコールにはならないという気がしますね。通信教育では直接的コミュニケーションがないままやっていて、例外的にスクーリング、つまり時間軸の縦の流れの中のある部分で集まって フェイス・トゥ・フェイス（face to face）の関係を確保しようということだったのでしょうけれど、放送大学だったら例えば、高名な社会学者、加藤秀俊先生が社会学を映像メディアで講じるとその後で、その内弟子の先生がライブで解説講義、場合によっては批判するとかいう、割りと贅沢な在り様が求められるのかもしれませんがね。どうしても学問の性質の違いみたいなものもあるんですが、私なんか文科系の社会学ですが、考えたら僕が使っている言葉の意味内容、込めている思いと、誰かほかの人が込めている思いと、同じ言葉を使っているけど違うということがある訳で、ひょっとして同じ台本でAさんとBさんがしゃべっても、全然違って受け止められる可能性がある訳ですよ。今の文科系の学問、もっというならコミュニケーション、言語論とかが向いているのは、そういった言語そのものがもっている客観性だとか意味の伝達性みたいなものをもっと個別化していこうとする方向性があるような気がするんですよ。そういう意味ではマスコミュニケーションとか、一人の語り手が匿名の多数の受け手にしゃべったときにほぼ同じことが伝わるだとかいう、素朴なコミュニケーション論があったとするなら、今のコミュニケーション論はこれをひっくりかえそうとする所に面白さというか、人間関係の解読みたいなある意味では微細な処に関心が向かっていく。すると、教育、学習というコミュニケーション自体も変容していく可能性もあるし、メディアで何かやっていけばいくほどその裏の読みの面白さを考えたときに、教育場面あるいは話し手・聞き手のコミュニケーション場面自体に何かもっと変容が起きる可能性がある。新しいメディアを使って教育という行為を仕掛けていこうとするときにそこまでの広がりを見込めることが、今は求められていると思うんですよ。

—— 一つの教育とかコミュニケーションの方法が受け入れられるための実験であるというふうに考えられる訳ですか？

岩見 考えてみたいですね。加藤先生あたりはご存じでしょうけれど、今一番コミュニケーション論が面白いですよ。それ自体がコミュニケーションになるというそういう発想でやっていったらまた新しいものが見えてくるんじゃないかな。

—— 放送教育では当然テレビとか電波を使うわけですが、電波とはある意味で一方通行のコミュニケーションであるという性格がありますよね。相手の姿がみえないから、たばこを吸いながらも飯を食いながらも、場合によっては一杯飲みながら授業を受けることが可能なんですよ。

岩見 そうそう、通常のコミュニケーション過程では考えられなかった文脈や背景そのものを  
ズラす従属的なコミュニケーションみたいなものが可能になるような磁場の中で、新しい形の  
コミュニケーション場面の実験を通して、すごいいろんなことが起こると思うんです。

### ●「銭湯」だって学習の場に

—— 単に有線放送を聞くとか、ビデオを見るとかいうメディアの問題だけでなく“場”自体  
の問題ですか。

岩見 そうです。僕は“場”の問題はすごく大きいと思います。だから話が飛びますが心理療  
法をはじめいろんなところで“場”の問題を非常に気にしていますでしょ。それが家族療法  
というようなものでは家族という集団の“場”なんです、いろんな意味で人間のコミュニケー  
ション行為自体がおかれている“場”、それを含めたコミュニケーション論のようなもの、話  
が少し外れたかも知れませんが、そんなことも考えていかないとならないという気がしますね  
え。だから異年令の集団と一緒に授業を聴く場合と、女性ばかりの中で男性がポツンといて聴  
く場合と、これは放送教育の現場へ行かなくとも、われわれの普通の大学の授業の現場でもあ  
り得る訳ですけど、そんなふうなことを含めて、放送教育の可能性というのは、講師が生身  
であつたらできないような色々な実験的な場面を想定していただけると分かると思うんです。  
話が変わるんですが、一時期トフラーなんかも言ったように、学校っていうものが、今のよう  
な形で全員集まって、顔を見合わせて授業をやるという、とりわけ小学校や中学校をイメージ  
していただければ良いのですが、そういう形から、在宅学習、すでに塾の一部もやり始めてい  
るような在り様ですね、それを公教育にどういうふうに取り入れて行くかという課題があると思  
うんです。一大銭湯のような、温水プールでも何でも良いのですが、そういう場で学習する  
ということが考えられるのです。結局何かと言え、やっぱりどこかで生身のワイルドでライ  
ブなコミュニケーションというのを持ちたいという。そこで週2回位、みんなでワイワイやる  
ようなことが起こるかも知れない。

—— それは、学習の場だけでなく、職場でも必要なコミュニケーションの質かも知れませ  
んね。

岩見 ええ、だからその種の人間のトータリティのようなものを視野に収めて、その中で放送  
教育が狙っているコミュニケーションのパターンなり、モードというのは何なのか。それ以外  
に、従来の教育の方法がカバーしていける領域は何なのかという、大きな視点で放送教育の在  
り方を完成していかなければ、放送教育という限定されたメディアだけで従来の教育に対抗し  
たり、補完しようとしたりするような狭い戦略では長続きしないような気がしますね。

—— 教える側の問題として、何を教えるのかという視点から考えれば、今の大学の大半は、  
こういう言い方をすれば大学の中にいらっしゃる先生に失礼になるかも知れませんが、学部・

学科や講座というふう縦割りになって、専門化していますよね。これに対して放送教育・放送大学の可能性や従来の大学との違いについていかがでしょうか。

岩見 僕は放送大学について余り知りませんが、設立趣旨なりを拝見して、それを自分なりに展開したときにはね、スタンスとしては現代という時代性とか、トレンドとかに逸速く適応して、極端に言えば一年毎に科目編成だとか、科目の中身自体も組み替えて行くような軽いフットワークでやって行くことが必要なんではないでしょうか。それがやれるのは、一般の大学ではなくて放送大学である筈だし、そういう風に自覚して運営していき、そしてそれが成功すれば、一般の既成の大学にもものすごくインパクトを与えていけるのではないかと。

### ●「総合」という名の「寄せ集め」では…

—— 要覧に載っている放送大学のカリキュラムを見ますと、一般の大学に比べるとかなり融通無碍な科目選択ができるようになっていて、学際的な感心にも応えられるような印象ですが。

岩見 それは、他の大学でも気付いていまして、例えばこの関西大学においても総合コースというようなものを設けていますし、受講者もいるのですがね。ところが、総合といっても教える側は必ずしも総合的な能力を持っているとは限りませんし、パッチワーク的なものにならざるを得ないのです。パッチワークでもでき上がったものが美しくなっていれば、それは「意味」があるから良いのですがね。ところが悪い意味でのパッチワークになり易い。要するに寄せ集めですね、テーマの寄せ集めになっているだけで、そういうものが「総合」の名に値するか。もう少し何というか、コーディネーターのような役割がきちんとできてこそ「総合」の意味が出てくるのではないかと思いますね。こういう問題は、おそらく全国の大学が抱えている問題で、どこの「総合コース」も、「総合科学部」も同じような問題を抱えていますよ。

—— 総合への欲求と同時に、今の大学は産業社会がどんどん変容して、先へ行ってしまうものですから、社会対応も迫られていますね。

岩見 そうすることへの対応のひとつとして社会人教育の問題があります。この大学（関西大学）においても、社会人教育、社会人の入学制度があります。まあ、見ていますとかなりのニーズがあるようですね。学部もそうですが、大学院の授業でもかなりの社会人、企業に席をおく人がいらっしゃるようですし。

—— そうしますと、既存の大学がやっている社会人講座とか社会人入学制度とかというものと、放送教育、放送大学などは競合する可能性もあるのですか。

岩見 それはまああるかも知れないけれど、それ以前に社会人教育をやっていこうとするなら、

大学や教える側自体の問題がまだまだ一杯あるわけで、それが克服できなければ競合とか何とかいえる段階ではないのではないかという気がしますよ。ご存じのように大学の教師というのは、自分の教える課目なりについてはかなりの深い知識は持っていますよ。もうそれが完全に身につっちゃっていて、講義ノートを見なくても、自分の作った講義ノートから一字一句はみ出さずにしゃべれるとかね。ところが、高校の延長で新しい知識を身につけようと素直に聞いてくれる学生ばかりだと良いですが、社会人教育とか生涯教育とかいうことになると、それなりに社会経験を積んできたり、社会的なものの見方を身につけている人に対して、ボロを出さずにやっていけますかということがあるんですよ。

### ●大学の先生は使いモノになるのか

—— 専門化した知識の枠組みに対して、学際的な方法論や、実際の社会的課題を当て嵌めた応用問題を解いて見せられるかということですか。

岩見 そう、知識の枠組みの硬直化という問題があり、知識の枠組みというようなものを過小に見ることのできるスタンディングポイントがなければならぬ。そうでなければ、応用問題なんかとける訳がありません。ときには、知識を丸抱えにして哲学的判断もしなきゃいかん、ときには小づかみにして細かな法律知識も駆使しなければいかん。実際、社会人というのはそういう風にして生きているし、そういう人達の知識欲求に応じていくために大学というところがそれだけの知的な蓄積があるかどうかということです。そういう観点からすれば、大学というところは相当遅れているのではないかという気がします。私なんか、大学の先生なんかより、最近のイキのいい、力のある評論家の方が、数倍勉強していますし、社会教育、生涯教育の教師としては優れているように思います。ですから、放送大学と既存の大学の競合がどうのこうのというより、それよりも社会のニーズに応じていけるような教育のシステムと、新しい教育の場、それに知識を総合化できるようなコーディネーターの発掘がいまいちばん重要な課題のような気がします。

—— ありがとうございました。